

2025 年度入学試験問題

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の注意事項をよく読んでください。
その際、問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子のページ数は 30 ページです。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 解答は解答用紙の問題番号に対応した解答欄ごとに1つだけをマークすること。
同じ解答欄に2つ以上マークすると無効となります。なお、解答用紙の番号は①～⑥まで記入してありますが、問題によっては解答する選択肢が6つ無い場合もあります。
5. 解答は HB の黒鉛筆を使用すること。
6. 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを完全に取り除いたうえ、新たにマークし直すこと。
7. 問題冊子の余白等は自由に利用してかまいません。
8. 解答用紙を持ち出してはいけません。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

アメリカ独立戦争とフランス革命に歩調を合わせるかのように進行する工業化の大波は、一九世紀に入ると貴族制からデモクラシーへの転換をもたらし、西欧の多くの国々の社会風土を大きく変え始める。工業化の先陣を切った英国、オランダ、少し遅れてフランス、次いでドイツ、そしてその後を追った国々では、民主化への覚醒とともにナショナリズムが台頭する。音楽の世界でも東欧やロシアでナショナリズムの運動（「国民楽派」や「五人組」など）が顕著になったことは^{（注1）}すでに見た通りである。リベラリズムとナショナリズムが結びついた「平等への情熱」は、芸術としての音楽の世界でも勢いを得はじめる。デモクラシーという統治形態は平等と自由に最大の価値を置くゆえ、平等への情熱だけでなく、自由の精神がどのように芸術にあらわれるのかを考えておかねばならない。

芸術の美は、厳格な規則のもとで自由に生み出された想像力の所産だと述べた。言い換えれば、規則（ルール、法）に縛られることによって、自由な精神が生み出した美であるということになる。これは制約があつてはじめて、自由は気儘やハウ^{（ア）}ジエ^{（ユ）}と区別されるという古典的自由主義の根本部分とも相通ずる思想だ。

A 具体的に制作における自由とはどのようなものなのだろうか。この点について「芸術と模倣の関係」という視点から、アダム・スミスが絵画や彫刻について指摘していることは参考になる。スミスは、模倣が芸術的な感動を高めうるか否かのポイントは、模倣するものと模倣されるものとの間の完全な「一致」ではなく、むしろ不一致（disparity）が存在しているところにあると言う。そして絵画と彫刻を例としつつ次のように論じる。

絵画の場合、三次元の実物世界を二次元の平面に移す作業であるから、彫刻の場合よりも、この不一致の発揮される自由度が高い。つまり芸術的な表現の幅や技量の入り込む余地が大きい。だからこそ、絵画では日常の風景（たとえばジャン・シメオン・シャルダン〔一六九九〜一七七九〕が描いた台所の食器や食材）が描かれ、それが芸術美を發揮する。彫刻の世界では食器や食材が対象として取り上げられる例はほとんどない。

絵画や彫刻は基本的には模倣の芸術とされてきた。スミスはこれら二つの芸術から得られる快樂は、「一種類の対象が他の非常に異なった種類の対象を表現するのを見た際の驚嘆 (wonder) に基づく」のであり、さらに、自然がそれらの間に確立した不一致を見事に克服する技術 (art) へのわれわれの称賛に基づく」としている。つまり模倣そのものに価値をおくのではなく、⁽¹⁾ 現実と作品との不一致を通して、知的工夫を加えて実在するものを表現する力量が、作品としての価値を決めると考える。言い換えれば現実と作品の距離と不一致が生み出す実在への知的想像力こそが、芸術的な感銘をもたらすとスミスは指摘するのだ。

スミスの考察は、B 二〇世紀の「社会主義リアリズム」の、芸術としての限界を予言しているかのようだ。スミスは絵画の美は、対象そのものをただ忠実に模写したのではなく、対象を三次元から二次元へ自由に写像 (mapping) する場合に発揮しうる不一致の中に存在すると見ているからだ。

この不一致は、画家の知的な創意工夫によって生まれる。個々の画家の創作意識が、美につながると考えるのは、スミスの時代の思想 (信仰) の自由、経済的自由の秩序感覚と重なるところがある。それはスミスが『道徳感情論』で、社会の美しい秩序と自発性について次のように述べていることから推量できる。「チェスボードの上で駒を動かすように容易に、巨大な社会の多数のメンバーを動かす」体制は、ひとつの「秩序」をめざしたシステムかもしれないが、すべての駒が持っているそれ自身の運動原理を無視することを意味する。したがってこの個人の運動原理と駒を動かそうとする為政者の意図が完全に一致すれば、社会は完全な秩序につつまれるかもしれないが、もし全く異なった原理で互いが動けば、社会は極度の混乱 (disorder) に陥るだろう。

「秩序」の美しさは、多様なもの、完全には一致していないものをひとつの全体に調和・統合することであるとスミスは見ていた。彼にとっての美の感覚は、一致そのものを目標とする写実やそのままの模倣ではなく、C 自由な工夫から生まれる不一致を根拠にしている。これは彼の絵画論と相似の関係にあると言える。

こうしたスミスの美の考察は、古典的自由主義が考える経済秩序と深くかかわっている。一般に経済社会の秩序には二つの種

類がある。ひとつは試行錯誤を通して自生的に生まれる秩序 (spontaneous order, grown order)、もうひとつは意図的な指示や強制によって生み出される秩序 (forced order, made order) である。この二つのいずれを選択するのかは政治体制・経済体制の選択となる。スマスが、一致ではなく、むしろ不一致が美をもたらすと考えた時、自生的秩序を念頭に置いていたことは言うまでもない。

総合の美や全体の秩序というものが、強制によって生まれるのか、それとも個々の不一致を許しつつ自律的かつ自発的な行動によって形成されて行くのか。どちらにより高い価値を見いだすのか。写真という「現実の模倣」に、すべての人民が理解できる美を求める社会主義リアリズムは「強制された模倣」に相当すると考えられる。自由な「不一致」が生み出す全体の秩序を重視するスマスが、模倣というリアリズムに美的価値を認めなかったことは明らかであろう。

(……中略……)

重要なのは、スマスのいう「不一致」は想像力から生まれ、また「不一致」は想像力を刺激するという相互関係だ。想像力は芸術的創造においても芸術鑑賞においても中核的な役割を果たす。裸のままの感覚に訴えるだけでは芸術とはなりえない。作品に接する者の想像力を知性のフィルターを通しつつ刺激する力がないと、芸術はセイレーンの歌のような魔的な (demonic) ものに終わってしまう。

この点は、日本の代表的な自由主義思想家の長谷川如是閑 (一八七五～一九六九) が、感覚と想像力について論じたことを想起させる。彼はロンドンで観た絵画で、アレゴリー (寓意画) を除けば裸体を描いたものはほとんどないと言う。テート・ギャラリーに行つてその事実を確認する。ヴィクトリア朝の画家 G・ワッツ (一八一七～一九〇四) もアレゴリーのテーマとして裸体を描いているが、「その裸体たるや全く実感挑発傾向を脱して、かえつて実感抑圧的の空恐ろしい裸体ばかりだ」と言う。こうした傾向は、パリのサロンが毎年「裸体の為の裸体」という純自然主義の仮面の下に「実感挑発的」な絵画を軒並み (イ) チンレツしているのとは大きな違いだと指摘する。

ジャーナリストとして如是閑は新聞の「挑発度」の違いにも注目している。デモクラシー国家で、新聞が次第に挑発的傾向を示すようになってきたのは世界的な現象であった。しかしロンドンの新聞はこの傾向が比較的弱いと彼は見る。米国の新聞は大事件が起こると「大々の刺戟を与うべく紙面を突飛な体裁に作る」。しかし英国では、見出しに大きな活字を用いるのは、特殊な新聞のすることで、普通はやらない。品格のある新聞は、あくまでも内容に全力を注ぎ、仰々しい体裁は取らないと言う。

長谷川如是閑の裸体画論は、英国の習俗について何を示唆しているのだろうか。人間の感覚を過度に刺激する（彼の言う「実感挑発的」な）ものを、社会的環境の選択肢の中から自律的に排除しようとする「秩序」への強い嗜好と想像力の重視を示していると考えられる。

この指摘は、^(注2) トクヴィルがラファエロは人体の描写に関して厳密性に重きをおいていなかったと述べた点と無関係ではない。ラファエロは自然を超えるつもりでいたからこそ、人間を人間以上の何かに描こうと欲したのではないか。それは「実感挑発的」な描写、完全な模倣という意味での「リアリズム」ではなく、美の「アイデア」の探究を^(ウ) ウナガサ作業であったと言える。

貴族制社会の裸体画の美的価値は、画家の解剖学的な知識によって高められたわけではない。鑑賞者は、その絵に示された美しさの向こう側にある「美」を想像するものと考えられていた。トクヴィルは、デモクラシーにおいては、美のアイデアは後退し、芸術は魂を描くことを避け、肉体の描写に専念するようになったと述べている。感情と思想の表現を、運動と感覚の表現におきかえ、ついには「理想」をおくべきところに「現実」をおくようになったと考えるのである。

長谷川如是閑は、英国の絵画が直接的で実感挑発的な写真に主眼を置いていないことに注目し、当時の英国の絵画が、まだ運動と感覚の表現の芸術ではなく、感情と思想の芸術であったことを意味すると見た。こうした如是閑の観察は、英国のリベラリズムの伝統とも重なる。美しいと感ずる具象物の向こう側にある「何か」を想像する力に価値を置いているのだ。

しかし⁽²⁾ デモクラシーはそうした想像力を奪い去る凶暴な力を持つてはいないだろうか。デモクラシーは、物質主義と個人主義（あるいはその墮落した形態としての「利己主義」）に陥らないための補完的な装置がうまく機能すれば、自由と平等を享受

しうる政治形態としての価値は大きい。そのためには、国家と個人の間位置する地方自治や中間団体の果たす役割が不可欠である。「いま、わたし」に関心を集中させがちなデモクラシーの社会にとって、最終的に重要な柱となるのは「未来、他者」に思いを致す公共精神だ。その公共精神は想像力を必要とする。それは宗教的感情と同じではないにしても、きわめて近い感情だ。宗教的根拠のない道徳は不確かであり、道徳的なベースを持たない自由は、時に人間社会を脅かす全体主義や画一主義、ポピュリズムを生み出す。

芸術がわれわれの生活にとって、その精神的な渇きを癒す力を持ち続けるために、そして人々が個人主義の墮落した形の利己主義に退化しないためにも、「いま、わたし」への関心だけでなく、「未来、他者」についての想像力の根を枯らしてはならない。その根を護ることによってはじめて、デモクラシーは全体主義や悪しきポピュリズムへと墮する道を避けることができるのではないか。

デモクラシーの「一人一票」という平等原則と「多数者の支配」の機械的な適用は、「美の評価」にどのような問題をもたらすであろうか。⁽³⁾ 平等主義の行き過ぎは、ここでも芸術にとっての危険要素となりうる。 絵画の教育において、批判し序列をつけることを避ける傾向はそのひとつだ。「それぞれに個性があつて、どれも良い」という平等主義の風土が芸術や文章の教育の場でも支配的となつてはいないか。「感じたことをそのまま書くのが大事だ」と直接的な感覚をそのまま描写することを良しとする姿勢はあたりさわりがなくかもしれない。しかしそこには長い時間を要する厳しい技術的訓練という側面が欠落している。音楽にも、絵を描くにも、文章を書くにもルールがある。それを学ぶためには、多くの時間をかけて沢山の優れた音楽を聴き、絵画を観、沢山の良い文章を読むという、感性を耕すための知的訓練が必要となる。そうした訓練によって習得された規則を守ることによって、はじめて制約の中から生まれる美しさ、アダム・スミスの言う「不一致」を表現する技量が培われ、鑑賞する者にとっても感覚を越えた知的喜びが生まれる。

「自由と平等」と個の尊重は、リベラル・デモクラシーの中核的な位置を占める理念ではある。しかし現実にはその「個」がす

べて同じような美への関心と理解力を備えているわけではない。したがって芸術の面白さや厳しさを伝えるためには、一定の「専門性」を有した人々が必要になる。そのひとつの例は、先に紹介したシューマンの「(注3)ダヴィッド同盟」のようなペリシテ人(俗物)と闘う同志的集団であろう。

デモクラシーと市場社会の中で、音楽のフェアな評価を行う批評家集団や同志的結合は存在しうるのだろうか。音楽批評家、あるいは音楽産業界でコンサートを含め製品としての音楽を世に送り届けるマネージメント・レコード会社は確かに存在する(例えば Askonas Holt、Intermusica、Harrison Parrott など)。しかしこうした専門家や職業集団が報酬や市場競争を意識すれば、「多数」へと照準を合わせても不思議ではない。本来は芸術の中に隠された多くの知的な創意と工夫を指し示すべき批評家やマネージメント・レコード会社は、概して経済効果やその背後の人間関係ゆえに、われわれに親切かつ有益な智恵と情報を十分提供してくれていないかもしれない。

専門家たちや批評家、あるいはマネージメント会社が趣味の良い選択を示すことによって、われわれは新しい美しさを知り、自分の感性をさらに磨くことができるはずだ。

D デモクラシーも市場も、常に多数に順応するようになり、音楽の持つ人間精神の中核に働きかける根源的な力を衰弱させてしまう可能性がある。

E 音楽芸術を宗教のダイ(エ)タイ物として祭り上げるべきではなからう。しかしそれでも、音楽の精神性、あるいは音楽が人間の知性と感性に及ぼす深く強い力を無視することは出来ない。音楽が先か、言葉が先かという二つの考えについて(注4)すでに触れた。仮に言葉が先で「主」であるとしても、われわれは言葉ではとらえきれないもの、理性を超越するものがあることを感知している。われわれにはそうした理性を越えるものへの期待や憧れがある。言葉や理性の限界を克服しようとするのが人間と機械の違いであり、その限界を知るところから祈るといふ気持ちが生まれる。そうであれば、祈りを起源のひとつとする音楽を言葉の単なる「しもべ」とみなすことは出来ない。

これまで、音楽と人間の感情の関係が単純なものではないことを見てきた。ドラマティックな強い感情を音楽で表現するため

に半音階や不協和音を多用しても、われわれの理性を越えたものを希求する気持ちに必ず繋がるわけではない。^(注5)調性を失った音楽が、理論的可能性を探究するという点では意味があるとしても、日常生活を送る普通の人々の魂を浄化し、^(オ)コブする力を与えてくれるとは限らない。その意味では二〇世紀後半以降の音楽は、一八世紀から一九世紀にその最盛期を現出した「クラシック音楽」とは意味も内容も効果も異なる、別のジャンルの芸術となるのではなからうか。

自由と平等は、人々の中に隠れていた様々な感情と多様な価値観を社会の表舞台へと引き出した。その結果、音楽に携わる職人たちはそれぞれ別の方向にその創造のエネルギーを注ぎ始め、音楽世界をバラバラに解体したように見える。生み出された音楽は、人間の感情や美的感性とは直接結びつかない、きわめて抽象的かつ無機的な音が交差する、祈りの精神とはおよそ無縁なもののように聴こえる。しかし祈りは単なる希求ではない。祈りは現状に対する「怒り」や「憤り」と考えることもできる。その意味では、現代の音楽もひとつの「祈り」であると言えることができるのかもしれない。

旋律もリズムも普通の人間の感覚で把握できない、「選ばれたもの」のみが理解できるとする新しい音楽、「調性がない」音楽を、どのように位置付ければよいのか。一二音の音高^(注6)すべてに主従の差なく均等な役割を与える音楽が聴衆の不在を生み出すとすれば、それは価値の多様化ではなく、価値という概念とは無縁な音の世界の出来^{しゅつた}を意味することになる。政治体制との類比で考えれば、徹底した平等を謳うデモクラシーは、一二音の音高の均等性によって中心を失った音楽のように、「多数の専制」がもたらす無秩序か、政治権力によって強いられた見せかけの秩序という、⁽⁴⁾自由の精神とは全くかけ離れた世界と見ることができよう。

(猪木武徳『社会思想としてのクラシック音楽』による)

- (注1) すでに見た通り——この著作では、近代の東欧やロシアでナショナリズムが表現された作品や作曲家の活動について検討された。「国民楽派」や「五人組」はその例。
- (注2) トクヴィル——アレクシ・ド・トクヴィル。十九世紀フランスの歴史家・政治思想家。
- (注3) シューマンの「ダヴィッド同盟」——シューマンが音楽を俗物的な悪趣味から守るために音楽批評紙上で展開した執筆活動に共鳴して活動したグループのこと。
- (注4) すでに触れた——この著作では、言葉と音楽のどちらがより根源的かについての古今の議論が紹介されている。
- (注5) 調性——和音や旋律が主となる一つの音を中心に統一的な機能を形成している音組織のこと。
- (注6) 音高——音の高さ。この場合は「音階」とほぼ同じ。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5。

- (ア) ホウジユウ 1
- ① 世論にモウジユウして政策を誤る。
 - ② 鯨は最大のカイジユウだ。
 - ③ ジユウゼンな検討を施す。
 - ④ ジユウオウ無尽に活動する。
 - ⑤ 生命力のジユウイツした作品だ。

- (イ) チンレツ 2
- ① 結果に意気シヨウチンする。
 - ② チンキな表現を用いる。
 - ③ 祭のチヨウチン行列を見物する。
 - ④ 山頂の寺にチンザする菩薩。
 - ⑤ 討議で自論をカイチンする。

- (ウ) ウナガす 3
- ① ユウソク故実の研究をする。
 - ② 税金納付のトクソク状が来た。
 - ③ 騒乱は十日後にシユウソクした。
 - ④ ソクブツ的な認識しか持てない。
 - ⑤ 衣冠ソクタイは貴族の正装だ。

- (エ) ダイタイ 4
- ① ケンタイ感につつまれる。
 - ② 梅雨前線がテイタイする。
 - ③ 王朝のリユウタイの歴史を学ぶ。
 - ④ タイシヤク表で経営状態を判断する。
 - ⑤ 王のタイカン式に出席する。

- (オ) コブ 5
- ① 選挙応援で候補者名をレンコする。
 - ② コヨウ統計は経済指標の一つだ。
 - ③ 緊張で心臓のコドウが速くなる。
 - ④ エイコ盛衰は世の常だ。
 - ⑤ 不当な扱いにはダンコ抗議する。

問2 空欄

A

E

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号はA—6、B—7、C—8、D—9、E—10。

- ① したがって ② では ③ もちろん ④ あたかも ⑤ さもないと ⑥ むしろ

問3

傍線部(1)「現実と作品との不一致を通して、知的工夫を加えて実在するものを表現する」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は11。

- ① ただの模倣を目的とせず、対象の真実の姿を捉えて表現するために芸術の領域に収まるよう知的な創造力を駆使し、新たな領域の表現を模索し続けるということ。
- ② 単なる模写ではなく、作家が芸術領域に内在する制約の中で創意工夫して対象を別の形式に置き換えて表現することで、その本質的な美を描き出すということ。
- ③ 作家が厳格なルールの中で自由に想像力を発揮して描き出した美を、それがどのように表現されているかを自己の想像力を頼りに捉え直して享受するということ。
- ④ 単に模写するのを避け、厳格な規則に従いながら自己の創意を加えて違う形に描くことによって、自己の想像の中にある対象の真の姿を形象するということ。
- ⑤ 対象を違う形で写し取る行為によって自己の想像力が解放され、それに知的な解釈を加えつつ対象が本来持つ芸術的な側面を明確化していくということ。

問4

傍線部(2)「デモクラシーはそうした想像力を奪い去る凶暴な力を持つてはいないだろうか」とあるが、その理由を説明

したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 芸術家にもそれを享受する鑑賞者にも独自の芸術的想像力が必要だが、デモクラシーのもたらす全体主義や画一主義は個々の独自性を否定するから。
- ② デモクラシーは自由と平等を標榜する以上それを健全に運用するための道徳的基盤が必要であり、それは未来や他者について想像できる公共精神だから。
- ③ 自由な想像力は、それを制約する規律があつてはじめて創造性を発揮するが、その制約のない自由は逆に公共精神を無化し想像力を涸渇させるから。
- ④ デモクラシーの謳う自由も、その前提となる道徳的基盤を失えば無秩序状態をもたらし、それを收拾するために特定の規範を強制する画一化が生じるから。
- ⑤ デモクラシーはそれを支える道徳的規範を失うと容易に物質主義と利己主義を肯定する体制と化し、公共精神を支える想像力を失わせてしまうから。

問5 傍線部(3)「平等主義の行き過ぎは、ここでも芸術にとっての危険要素となりうる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 個々の技術の違いを無視して平等に評価することは、技術の追求への意欲を失わせ未熟で恣意的な表現を肯定する結果をもたらす場合があるということ。
- ② 平等を建て前として批判や序列化を避けようとする姿勢には、技術的裏付けのない表現をも認めることで高度な表現の価値が失われる可能性があるということ。
- ③ 平等である以上どのような表現でも認める態度には芸術表現の前提となるものに対する敬意がなく、結果的に芸術を否定してしまう危険があるということ。
- ④ 芸術表現にはそれぞれのジャンルに特化した技術が必須だが、平等主義の評価はそれらの技術間の優劣を問題とせず同列に扱ってしまいかねないということ。
- ⑤ 個人の特性を無視した平等主義は、芸術という特定領域を支えているものの存在を軽視し、通俗的で安易な姿勢を助長する恐れがあるということ。

問6 傍線部(4)「自由の精神とは全くかけ離れた世界」とはどのような「世界」か。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 平等であることを至上の価値とすることで生じる、個々の違いが不明確で統一感に欠ける画一的で調性を失った音楽のような世界。
- ② 自由と平等というデモクラシーの理念の矛盾が露呈し、平等を選んだ結果もたらされた、個人の自由より他者との協調が重視される世界。
- ③ 一二音すべてに同じ役割が与えられた音楽のように、一人一人平等に役割が与えられ、それを果たすことで自由を失ってしまった世界。
- ④ 平等主義の徹底によってもたらされた、社会的価値観の崩壊した無秩序あるいは外部から規範が強制され個々人の個性が抑圧された世界。
- ⑤ 平等主義が無際限に拡大することで個々の違いが捨象され、それにつけ込んだ政治権力によって全体主義的な価値観が強制される世界。

問7

本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。解答番号は

15

・

16

。

- ① 芸術作品は、厳格な規則に基づいて自由に想像力を働かせる作家の営為と、それを自らの想像力を駆使して気儘に解釈する鑑賞者の共同作業として成立する。
- ② 誰もが理解できる美を追究しようとした社会主義リアリズムは、結果的には美の世界に平易さを強制するばかりでその高度な発展を阻害してしまった。
- ③ 自由と平等という、デモクラシーを支える二つの理念は、適切な制御を失った場合は政治的にも芸術的にも大きな問題を生じさせる。
- ④ 芸術を享受する側の理解力もさまざまなレベルが存在する以上、恣意的な解釈や評価に陥らないためにも専門家の導きに従う必要がある。
- ⑤ 言葉が理性と対応するなら、音楽は人間の理性を越えたものに対する憧憬に対応する芸術であり、その点で宗教と響き合う側面をもっている。
- ⑥ 二〇世紀後半に新たに登場した調性を失った音楽は、抽象的かつ無機的で人間の感性とは結びつかず、これまでのクラシック音楽を否定するものである。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

奢侈^{しゃし}や贅沢^{ぜいたく}が新しい表象を獲得したのは18世紀のことである。この時期、イギリスやフランスにおいて贅沢の是非をめぐる、いわゆる奢侈論争^{しゃしろんそう}が起きている。この論争の口火を切った^(注1)フランソワ・フェヌロンの『テレマックの冒険』はベストセラーとなり、贅沢を厳しく窘めた^{たしな}ことで知られる。

だが、私たちの関心からとりわけ重要なのは、やはりオランダ出身の精神科医バーナード・マンデヴィルである。マンデヴィルは道徳家のシャフツベリーを批判しつつ奢侈擁護論を展開し、奢侈論争の中心人物になった。この論争において贅沢はもっぱら経済的、道徳的観点から評価されていたが、マンデヴィルが母国オランダの経済的成功から（このあとに述べるヴェブレンよりも200年ほど先に）「誇示的消費」^(あるいは「顕示的消費」)という考え方に到達していたことは注目に値する。

こうした消費を新しい経済学の主題として切り出したのは、アメリカの経済学者ソースタイン・ヴェブレンの功績であった。ヴェブレンによれば、私有財産制において蓄財の目的は身体的な欲求を満たすためというよりも、自分と同じ階級に属する人々を出し抜き、世間の評判を保つためのものであった。つまり、蓄財の主たる動機となるのは比較と差別化にはかならない。「財による比較と差別が行われる限り、人は財を競い、財力に対する評判を際限なく追い求め、競争相手より格上になることに無上の喜びを見出す」^{(ソースタイン・ヴェブレン『有閑階級の理論(新版)』村井章子訳)}ようになるわけだ。

こうした財の張り合いにおいて、富裕な階級はしだいに生産的労働を自分たちには相応しくないと拒絶するようになる。富を獲得しようとはくせく働くのは卑しくみつももない、そうした労働に従事しなくても富を享受できることこそ勝者のあかし、というわけである。こうしてヴェブレンが「誇示的閑暇」と呼ぶもの、つまりは暇であることをひけらかすといった行動

X

が現れるようになる。つまり有閑階級は「時間の非生産的な消費」に勤しむようになったのだ。

さらに19世紀の末頃には、「誇示的閑暇」から「誇示的消費」への移行が起きる。産業化や都市化が進んだところでは、閑暇

によるのみでは財力を見せつけるのに十分とは言えないからだ。誰からも一目で分かるよう、財力を印象付けなくてはならない。ある論者は次のように言っている。

ヴェブレンの時代には、金ピカ時代の目に余る顕示的消費が、浪費的な消費を証拠立てることがもつ社会的な意義を証明するのに役立った。要するに、豊かであることだけでは足りないのだ。それにふさわしい地位は、その富つまり富者の支払能力が、誰の目にも明らかになつてはじめて確保されるのである。(ロジャー・メイソン『顕示的消費の経済学』鈴木信雄ほか訳)

誇示的消費は「対抗心」、つまりは「自分と同類とみなしている他人を上回りたいという気持ち」に動機づけられている。だが、そうした競争には終わりはない。「財の蓄積を競うのは、本質的には他人との比較に基づく評判を得るためである以上、最終的な到達地点はない」(ヴェブレン『有閑階級の理論(新版)』)。ヴェブレンの時代、この勝者なきゲームの主要なプレイヤーは有閑階級と呼ばれた人々であったが、ほどなくしていつそ多くの人々がここに包摂されることになるだろう。

19世紀後半から20世紀にかけて、中産階級や労働者階級の購買力も高まり、彼らもまた贅沢品を消費することができるようになった。それにもない、誇示も有閑階級に特有のものではなくなっていく。つまり消費社会のもとで、誰もが多かれ少なかれ誇示する資格を得るようになり、いわば「⁽¹⁾誇示の民主化」とも言うべき現象が起こるのだ。

I ^(注2) スーザン・マットが

見事に描き出すところでは、たとえば世紀の転換期のアメリカにおいては、人々が贅沢品や奢侈品への欲望を包み隠さずに表示することができるようになり、中間層が富裕層を模倣するプロセスが進行した(Susan J. Matt, *Keeping up with the Joneses: Envy in American Consumer Society, 1890-1930*)。

ここで注目しておきたいのは、嫉妬心についての社会的な評価が変わり、人々を満足に突き動かす感情としてポジティブに捉えられるようになったことである。これまでの章で見てきたように、19世紀以前の考え方からすれば、おおむね嫉妬心は恥ずべ

き、非道徳的なものであり、消費や贅沢品に対する欲望も宗教的な慎み深さによってある程度抑制されていた。

しかし、1920年代頃のアメリカでは、広告業者、エコノミスト、ジャーナリストといった人々によって、嫉妬についての新しい考え方が広められたという。彼らは、それ以前の考え方、つまり人にはそれぞれ神によって与えられた社会における位置があり、高望みせず、身の程を弁えるべきだといった考え方を批判し、嫉妬に新しい意味を与えることに成功したのだ。それが、嫉妬は消費への支出を喚起し、国民全体の生活水準を底上げし、経済成長を推し進めるかぎりですれほど悪いものではなく、場合によっては望ましいものですらありうる、といった考え方にほかならない。マットはこう言っている。

嫉妬の意味や正統性のこの変化が重要なのは、それが消費経済の拡大を支えた新しい感情的かつ行動スタイルの一部であったからである。人々が物質主義に関する宗教的な慎みを克服し、快楽や贅沢、そして欲望を強調し、抑制を重視せず、なかなか満足しようとしなないといった感情的スタイルを発展させてはじめて、アメリカで成熟した消費社会が可能であった。

消費社会が発展するなかで、人々は妬み感情の道徳的な後ろめたさから解放され、自由に欲望を表明できるようになった。当時、こうした趨勢を

Y

表現したフレーズが「ジョーンズ家に後れを取るな (Keeping up with the Joneses)」であった。

このフレーズは、「嫉妬や競争心 (emulation) が、罪深く危険な情念であるというよりも、当たり前で広く行き渡った社会的な衝動であったことを示す」ものであった。

II

ところで、こうした変化を描き出すにあたって、マットが注目したのは都市の女性たちである。1910年代頃までには、ファッションからピアノや家具まで、中産階級の女性たちは自らの嫉妬心に忠実に富裕層を模倣するようになっていた。こうしたプロセスは、家庭を守るといった道徳的で保守的なイメージから女性を解放するものであった。大量生産によって商品の希少性は薄れ、多くの人々にとってアクセスしやすいものになっていったこともこの傾向を後押しした。

III

誇示に話題を戻すことにしよう。マットが描き出したのは、誇示の民主化とも言える新しい消費社会の台頭であった。ここに来て、なにやら誇示には根本的な変化が起きている。つまり誇示者は嫉妬者の承認にますます依存するようになり、その自慢にはかつてのような威信は見られず、⁽²⁾どこか不安げでもある。

IV

こうした現代人のあり方を、^(注3)デイヴィッド・リースマンは新しい社会的性格として「他人指向的性格」と呼んでいた。つまり、他人の評価なしには自分の価値を定めることができないような新しい人間の類型を現代人のなかに認めたわけだ。それは次のようなものである。

他人指向型に共通するのは、個人の方向づけを決定するのが同時代人であるということだ。この同時代人は、かれの直接の知りあいであることもあるし、また友人やマス・メディアをつうじて間接的に知っている人物であってもかまわない。(……) 他人指向型の人間がめざす目標は、同時代人のみちびくがままにかわる。かれの生涯をつうじてかわらないのは、こうした努力のプロセスそのものと、他者からの信号にたえず細心の注意を払うというプロセスである。(デイヴィッド・リースマン『孤独な群衆(上)』加藤秀俊訳)

それ以前に支配的であった社会的性格である「伝統指向型」や「内部指向型」とは違い、現代人は他人がどう思うかといった評価を何よりも気にかける。リースマンはこの同時代人の範囲を「銀河系」と表現するが、人々はその銀河における自分の立ち位置に腐心し、他人との比較をやめることができない。つねに不安に苛まれながらも、他人からの承認を渴望している、そうした存在である。

V

リースマンはこうした新しい性格類型を1950年のアメリカ社会に見出している。しかし、これがかなりのところ現代社会に普遍的な性格類型として提示されている点に注意しよう。そして彼はこう予言するのだ。「この他人指向型の人間は若い年齢層、大都市、そして上層階級にみられる類型であるから、この型の性格がアメリカゼンたいのヘゲモニーをとることは、現代の傾向

からみて、時間の問題であるようにおもえる」。

現代社会もまた、概ねこうした大衆化の延長線上にある。こうした傾向に拍車をかけているのが、いうまでもなくマスメディアの発達である。

ただし、誇示の主要な舞台はいまやインターネットに移っている。とりわけSNSの爆発的な普及は誇示をめぐる風景を大きく一変させた。

ソーシャルメディアの登場は、私たちの振る舞いにどう影響しているだろうか。ここではアレクサンドラ・サミュエルの議論を見てみよう。それによると、第一に、ソーシャルメディアにおける「近接性 (proximity)」の変化が指摘されている。一般に、私たちは身近なものほど親近感を抱きやすいが、ソーシャルメディアは、従来であれば知らずに済んだ他人の生活を覗き見ることを可能にし、いまや私たちの視野に入る範囲は、事実上、無制限になった。

第二に、ソーシャルメディアは社会的障壁を無効にし、これが人々の比較を解き放つことになる。かつては自分と同じ階級、同族の範囲内に留まっていたが、会ったこともない、そしておそらく今後も会うことのない他人との絶え間ない比較が始まったのだ。「さまざまな階級が競争と互いの比較をはじめるのは、既成の秩序が解体しつつあり、人間のあいだの差異が曖昧になるときである」(デュムシエル／デュピュイ『物の地獄』)とは、まさに私たちの時代にこそ当てはまる。

そして最後に決定的なことに、かつて「持つ者」は「持たざる者」からの嫉妬を恐れ、富や成功を隠す傾向にあったが、ソーシャルメディアの時代にあつて人々は自身の幸福をもはや隠そうとはしない。それどころか、自身の幸福を過剰に繕い、実態以上に見せることすらある。「私たちは妬みを引き起こしかねないものを隠すという考え方をやめ、嫉妬されそうな経験や獲得を褒め称えるようになった」(Alexandra Samuel, “What to Do When Social Media Inspires Envy”)。これにより、自慢と嫉妬の弁証法は相乗的に加速するだろう。

こうして、「万人の万人に対する誇示状態」ともいえるべき事態が到来した。新年度のいっせいの着任・異動報告をはじめ、助

成金や賞の獲得実績の状況、回転寿司チェーンでの人生を張った奇行まで、⁽³⁾人々は休みなく誇示へと強制されている。

(山本圭『嫉妬論——民主社会に渦巻く情念を解剖する』による)

(注1) フランソワ・フェヌロン——十七・十八世紀のフランスの神学者・作家。

(注2) スーザン・マット——アメリカの歴史家・作家。

(注3) デイヴィッド・リースマン——アメリカの社会学者。

(注4) アレクサンドラ・サミュエル——アメリカのジャーナリスト。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 本文中の空欄 I Ⅰ V のうちで、次の文を補う箇所として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

こうして、いわば贅沢品を誇示して消費することが大衆化Ⅱ民主化したのである。

- ① I ② II ③ III ④ IV ⑤ V

問2 空欄 X Y を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 18・19。

- | | | | | | |
|-------|------|--|--|--|--|
| Y | X | | | | |
| ① 急激に | ① 論議 | | | | |
| ② 劇的に | ② 道徳 | | | | |
| ③ 婉曲に | ③ 目的 | | | | |
| ④ 端的に | ④ 模倣 | | | | |
| ⑤ 先鋭に | ⑤ 規範 | | | | |
- 19 18

問3 傍線部(1)「誇示の民主化」を説明したものとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20。

- ① 有閑階級の誇示的消費に嫉妬していた中産階級や労働者階級が、自らの購買力の上昇とともに有閑階級への嫉妬を肯定し彼らを模倣して熱心に誇示的消費をするようになったこと。
- ② 嫉妬心をむしろ経済成長の導因と捉える見方の登場によって奢侈や贅沢が肯定され、中産階級以下の人々も誇示的消費をすることによって有閑階級の仲間入りをしようとする事。
- ③ 有閑階級の独占物だった贅沢品や奢侈品への欲望が、宗教的な慎み深さが薄れ嫉妬の意味が変化する過程で肯定され、中産階級や労働者階級が富裕層を模倣するようになったこと。
- ④ 贅沢品や奢侈品も消費社会において手の届かないものでなくなることで、嫉妬心を評価する考え方が登場し、自己の欲望を解放した人々が誇示的消費をするようになったこと。
- ⑤ それまで有閑階級の特権だった誇示的消費が、嫉妬心が肯定的に評価されるようになる時代的趨勢を背景に、大量消費時代の到来によって中産階級以下にも浸透していったこと。

問4 傍線部(2)「どこか不安げでもある」とあるが、なぜ「不安げ」なのか。その理由を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 自分の行動は自分で決定すべきなのに、他者の評価を基準に判断するのは自己の判断能力への自信のなさの現れだから。
- ② 同時代人の趣味に合わせてよとする他人指向型の人間は、本来準拠すべき伝統や内面的価値を持ち合わせていないから。
- ③ 以前のように伝統や自己の内面に依拠して判断するのではなく、移ろいやすい他者の評価が自己評価の基準となったから。
- ④ 他人の承認なくしては誇示ができない他人指向型の人間には、もともと誇示をするだけの内面的必然性がないから。
- ⑤ 他者からの評価を気にし、承認されることを目的に誇示をするのは以前の有閑階級の誇示とは性質が違うものだから。

問5 傍線部(3)「人々は休みなく誇示へと強制されている」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 万人が互いに他者の幸福を嫉妬し、またその嫉妬に満足感を得ようと幸福な自己を演出するという循環に支配されて、幸福自慢の競争から脱却できずそれを強迫的に続けているということ。
- ② ソーシャルメディアの普及によって、見知らぬ他人に対しても自己の幸福を自慢できるようになったことで誇示が大衆化し、皆が互いに自慢し合う競争が止まらなくなったということ。
- ③ 見知らぬ他人との際限ない比較が他者から嫉妬されるような自己への願望を生み、自己の実態以上に幸福を装った姿を投稿して他者の称賛を求めずにはいられなくなったということ。
- ④ 会ったこともない人物の幸福を羨望し、自己も同様に幸福であるかのように見せかけて他者の嫉妬と羨望の的になろうとする行動に囚われ、それを自省することもできないということ。
- ⑤ 万人の万人に対する誇示が常態化してしまった現在、その終わりのない競争には勝者もないことに気づきながらも、他者に負けることを嫌ってやめるにやめられなくなっているということ。

問6 本文の内容と合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① ヴェブレンの主題とした「誇示的消費」は、その200年ほど前にバーナード・マンデヴィルが奢侈論争の渦中で示した概念である。
- ② 「誇示的閑暇」は世間の評判を保つためのものであったのに対し、「誇示的消費」は他人を上回りたいという対抗心に基づくものであった。
- ③ 誇示が中産階級や労働者階級に広まっていったのは、彼らの購買力が増したことと同時に大量消費の時代が訪れたことも大きな要因だった。
- ④ リースマンの指摘した他人指向型の人格は、彼の言及した1950年代のアメリカだけでなく、現代の社会にも広く見られる類型である。
- ⑤ ソーシャルメディアの発達は誇示の大衆化に拍車をかけ、現代では会う可能性もほとんどないような人物の幸福への嫉妬が社会に充満している。

第三問 以下の問いに答えよ。

問1 次の文の傍線部と文法的に同じものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

努力の大切さはわかっていても、ともすれば怠けてしまうのが人間だ。

- ① ありとあらゆる手段を尽くしても解決しなかった。
- ② 台風に襲われた小舟は海の藻屑となってしまった。
- ③ 大雪が降ると交通機関への影響が心配される。
- ④ 彼は追求に対して誠実に答えると言明した。
- ⑤ この法案にはとかくの噂がつきまといっている。

問2 間違った漢字が用いられている文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 25。

- ① 今月の営業目標が、模造紙に書かれて壁に張り出された。
- ② 探索が不十分なまま終わってしまつて、隔靴搔痒の感がある。
- ③ 博物館には、大正年間の古い蓄音機も展示されていた。
- ④ 学術論文では、疑態語を多用した文章はあまり推奨できない。
- ⑤ 世界各地には、現在でもさまざまな呪術的秘儀が伝承されている。

問3 A・Bの外來語とその訳語の組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 26・27。

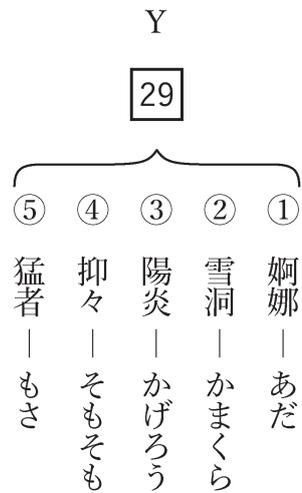
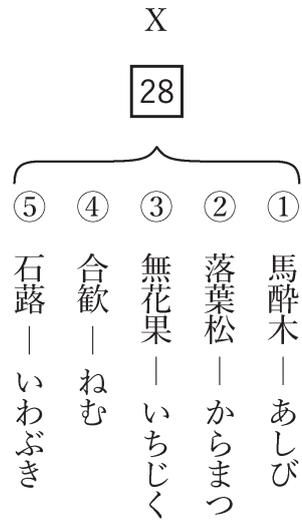
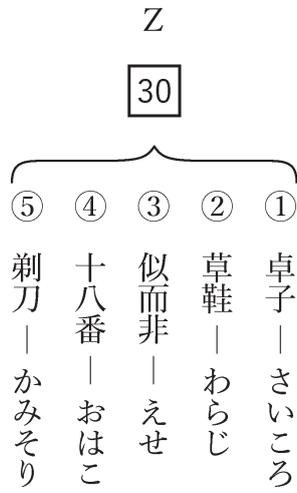
A 26

- ① アンビバレンスー両面性
- ② サンクチュアリー社会的制裁
- ③ リリシズムー抒情性
- ④ フェティシズムー物神崇拜
- ⑤ バガボンドー放浪者

B 27

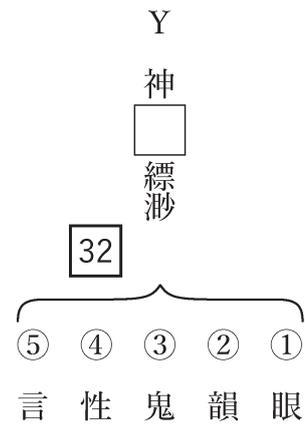
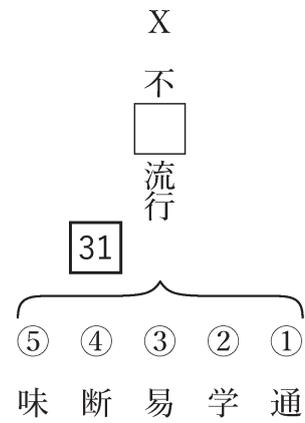
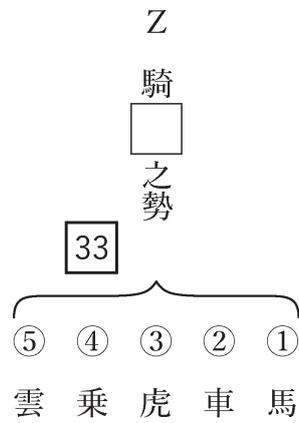
- ① シークエンスー連続
- ② クリシェー常套句
- ③ ビブリオグラフィー宗教画
- ④ アクチュアルー時局性
- ⑤ アノミーー混沌

問4 次のX、Y、Zの漢字と読みを組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は28、30。



問5 次のX～Zの四字熟語の空欄を補うのに最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

31
～
33。



問6 次の熟語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

無何有

- ① 何もないことから、無駄骨折りのこと。
- ② 何もないことから、自由に利用できる状態。
- ③ 何もないことから、価値のないこと。
- ④ 何もないことから、作為のない自然な状態。
- ⑤ 何もないことから、財産も能力もない状態。

問7 慣用句の使い方として正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 予算が充分あって足が出たので、それを使って打ち上げ会をしよう。
- ② 目論見通りの結果を見て、思わず舌を鳴らして喜んだ。
- ③ 彼はとても手が早いので、楽器の演奏などいつも見事だ。
- ④ 昨晚思いついた改善案を腹に持って、企画会議に出席した。
- ⑤ 人のことをとやかく言う前に、自分の頭の上の蠅を追うべきだ。